

石油、男鹿で眠る

いずれは必ずやってくる石炭や石油などの化石燃料枯渇の日。人類は、残り少ないこの資源を、大切に大切に使わなければならない。同時に、化石燃料がもたらす地球温暖化の歯止めも、全世界的な課題。

今は、一人一人がこぞってエネルギー問題を考えなければならぬ時代だ。アメリカのオバマ大統領は、風力発電などの再生可能なクリーンエネルギーの開発に力を入れると声明している。そういえば、秋田でも最近では街でハイブリッドカーを見かけることが多くなった。車両価格はまだまだ割高ながら、エネルギー問題に真剣に目をむける人が多くなってきたということだろう。好ましいことだと思う。

全世界的な石油の枯渇も深刻だが、「地域的な枯渇」も考えておかなければならない。国内で消費される石油製品のほぼ全量を輸入原油に依存している日本は、一朝事いちあさことが起こって石油の輸入が止まれば、たちまち国全体の機能がまひしてしまう。そのため備えが、前もって石油を備蓄しておくという方策だ。現在日本には、国家石油備蓄基地が10カ所あり、民間備蓄も合わせた石油の総備蓄量は約9千万kl、これは、日本で必要とされる石油の半年分に相当するという。

わが秋田にも、男鹿市船川港に「秋田国家石油備蓄基地」がある。ここだけでも日本の石油使用量の1週間分を備蓄できるというから相当なスケールであるが、外観上はそれほど大きな施設には見えない。それは、ほとんどのタンクを地中式にしているためだ。深さ50m余りのタンクは、地上部にはわずか3・5mしか顔を見せていない。タンクは、直径90mのものが4基、97mのものが8基。地中式のタンクとしては世界最大級である。船川港の地中に、日本で使用される1週間分の石油が、静かに静かに眠っているのである。この石油備蓄基地は、非常時に向けた備えではあるけれども、同時に、残り少なくなった化石燃料の象徴として、資源問題を考えるときに思い出したい場所でもある。

写真左下に写っている人物との比較でもこの地中タンクの大きさが理解できよう。このタンクは現在開放点検補修工事中だが、備蓄時は足元の浮き屋根が浮上する。

